

わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 85

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

ひのえうま伝説のゆくえ

ひのえうま生まれの女性には、気が強く夫を殺してしまうこともある、まことしやかな「ひのえうま伝説」だ。もちろん、根も葉もない言い伝えであり、今の若い人は聞いたことがないという人も多い。

都市伝説やパワースポットなどの、非科学的な話題はウケがいい。不況のときはホラーが流行るといったジンクスもある。日常ではない不思議な出来事や現象は、自分が迷惑を被らないのを前提に、適度に楽しむにはちよいどいい暇つぶしでもある。ひのえうまの言い伝え

そのものには根拠がないといいつつも、60年に一度めぐってくる干支であり、十干と十二支を組み合わせた古代中国由来の暦である。数え年の61歳は生まれた干支にもどるので「暦が還る」の意味で還暦というなど、結構古くからの慣習とはなじみ深いものである。

近いところでは昭和41年（1966年）がひのえうまであった。まだこれほど少子化が深刻ではなかったこの年になんと出生数が前年比25%も低下している。つまり、ひのえうま伝説を信じて出産を控えた人が多いとい

うことだ。厭われるのは、ひのえうま生まれの女性であるが、男女の産み分けができないために、とりあえずそのような不吉な年生まれの子どもは作らないでおこうという、単純な発想から来たものだろう。

ひのえうまの発祥は、

次のひのえうまは、
2026年である。



らまたあの恋しいお人に会えるだろう、と。まだ幼かった彼女は、火事になればまたあの寺に行けると考え、放火の罪を犯そうとする。自分の恋を成就させたい欲望の代償にその罪を問われ、結果火刑に処せられてしまう、というお話。この実

話を3年後に井原西鶴が「好色五人女」に取り上げ、一連のあらましを劇的に変貌させ、これが大あたりとなるのである。

また、江戸時代には、この年生まれの女性は死んだら「飛縁魔」という妖怪

江戸の「八百屋お七」にまでさかのぼる。江戸の大火を逃れて、あるお寺に避難したお七は、そこで出会った若き小坊主と恋仲になる。家に帰ったお七は考える。どうした

になるといわれていた。「飛縁魔」は「火の閻魔」に通ずる。いわばひのえうまとは、実話と創作と伝説がそれらしく絡み合っただけで現代まで影響を与えていることになる。

この種の話は、どここの国でもあるだろう。しかし、昭和の時代にそれを信じて出産の時期を調整するといふように、これほど大規模な影響を与えた例は多くない。しかも、どちらかというと都会の若い母親がこれを信じたとも聞く。昭和41年の60年前のひのえうまは明治時代であるが、このときも、ひのえうま生まれの女性はそれだけで嫌われ結婚できなかった例が多かったという。

お七の恋狂いより、妖怪よりも、感情が先走ることで起こる人間の集団行動のほうがよほど恐ろしいと思うのだがどうだろうか。次のひのえうまは、2026年である。そのときの社会のあり様は想像もできないが、もし生きていたら、出生率にいくらかの変化をもたらしたかどうか、是非知りたいものだと思う。

イラスト・三浦義雄